

# 「村」に暮らす、「村」を写す

—— 角田勝之助（福島県大沼郡金山町）聞き取り ——

榎 本 千 賀 子

角田勝之助（1928〔昭和3〕年～）は、昭和26年より現在まで、60年以上にわたって、自らの「村」（福島県大沼郡金山町大字玉梨湯ノ上を中心とする地域）とそこに暮らす人々の姿を写真に収め続けている。地域映像アーカイブは2013年度より角田の写真の調査・デジタル化に着手し、その成果を「村の肖像」展シリーズ（2013年〔新潟大学旭町学術資料展示館〕、2014年〔同学術資料展示館、砂丘館〕）として公開してきた。

険しい地形と豪雪に向き合う奥会津の暮らし、「村」の濃密な人間関係のなかで、戦後写真表現の時流とは一線を画して生み出された角田の写真は、独自の魅力をたたえている。また、ひとつの地域を共同体の内部から長期間撮影してきた角田の写真は、狭義の「美術」を越えて写真による創造行為の多様なありかたを再考してゆく上でも示唆に富む事例であり、さらには歴史・民俗資料としても貴重なものであるといえる。

本資料は、さらなる角田の写真理解と活用に向けて、角田とその近親者を対象に撮影の背景や「村」の暮らしについて尋ねた2回の聞き取りをまとめたものである。本資料に登場する話し手は以下の通りである。（各話し手氏名の後に付した括弧には、本文中における略称／角田との関係、役職／玉梨内在住部落名を記した。また、角田家家系図を原田論文図4に掲載している。原田論文内では玉梨内の湯ノ上以下の近隣組織を小字、組と呼んでいるが、本稿では話し手の発言のまま「部落」と表記している。）

○2014年11月3日聞き取り

角田勝之助（角田／湯ノ上），角田コマノ（コマノ／妻／湯ノ上），角田ノブ子（ノブ子／角田家本家／湯ノ上），谷ヶ城与四郎（与四郎／義弟／湯ノ上），栗城辰男（栗城／仲人きょうだい，元谷ヶ城建設役員／西中井），船城俊太郎（船城／角田家親戚，元新潟大学教員／上中井）

○2014年12月7日聞き取り

角田勝之助，角田コマノ，角田ノブ子，谷ヶ城雄司（雄司／コマノ親戚，元谷ヶ城建設役員／西中井）

調査は2回とも角田の自宅で行い，聞き手は原田健一（原田），北村順生（北村），榎本千賀子（榎本）の3名であった。本資料では聞き取りを内容ごとに整理し，各項目の見出しの後ろに聞き取りの日付を付した。なお，行事等の整理に際しては金山町史出版委員会編『金山町史下巻』（金山町，1976年），金山町教育委員会編『金山の民俗』（金山町，1985年）を参照した。

## 1. 角田勝之助経歴

角田は1928（昭和3）年11月27日，湯ノ上に暮らす角田弥一・スギノ夫婦の息子として生まれ，現在まで生家を離れることなく暮らしてきた。湯ノ上は只見川支流の野尻川に面した大峯山の中腹に展開する玉梨の端郷で，角田家は弥一が分家して興した新しい家であった。

角田は玉梨尋常小学校卒業後，川口尋常高等小学校へと進み，その後終戦まで川口青年学校で学んだ。6キロ離れた川口までの通学は，雪道ともなると1時間半から2時間かかったという。そして角田は，青年学校在学中に写真に興味を抱き始める。

### 《カメラの購入》（11月3日）

原 田 カメラを買おうというのが，（昭和）18年ぐらいですか。

角 田 18年頃から興味を持って。19年の何月だったか忘れたが，その頃注文

したんですが、それが終戦で、戦災で来なくなって。

原 田 その時のカメラというのが、ライカかなんかだったんでしたっけ。

角 田 なんだっけか。もう、何も残ってないから忘れちゃったがな。35ミリ判の、ある程度いい加減のカメラを注文したわけだ。

原 田 それは日本のカメラじゃなくて、外国のカメラなんですか。

角 田 いや、ライカは外国だけど、外国のカメラまではいかなかったと思うんだがな。機種なんかは、何十年もしたから忘れた。

原 田 でも、それなりにいい35ミリ判のカメラを注文したということですね。

角 田 そうなんです。それで（カメラが）来なくて。あと、終戦になって何もない時代が5、6年続いたから。ようやく手にしたのが（昭和）26年だと思ったんですよ。その時はそんなにいいカメラじゃなくて、蛇腹式の6×6判。ウィルミー6というやつじゃなかったかと思うんだが。それがセミ判と（6×6判の）両方撮れるようなカメラだったのです。

#### 《戦後の仕事 国有地での開墾と私有地での農業》（11月3日）

原 田 カメラを買うまでの間何をしていたか聞いておきましょうか。終戦後。

角 田 終戦後は、まあ、食糧難だから。

原 田 でも、ここら辺は食料がいっぱいあるんじゃないですか。

角 田 あるけども、結局作れってというようなことで。もうそれだけしかやっていないですよ。田畑が少しあったから、6キロぐらい山を越えて行ったところに作物を作ったりなんかして。1時間半から2時間ぐらいかかるんだ。

北 村 もともとおたくの田んぼか畑がその先に、6キロ先にあったんですか。

角 田 いや、それは違うの。それは国有地を払い下げて、畑を耕した。植林地を切って畑にして。

原 田 いわゆる増産のためにしたわけですね。

角 田 ええ。20年から5、6年は何もない時代だから。袖山のほうまで行って畑を作ったことがあるわ。おまえ（コマノ）はいねえわけだな。まだ嫁に来る前だ。

原 田 いつ一緒になったんですか、ご結婚なさったのは。

コマノ (昭和) 27年。

角 田 ようやくもう、品物も出始めた頃なんですよ。

原 田 カメラを買って奥さんもらったと。こういうことですか。そして、終戦後の5、6年はほとんど国有地の、営林署の拓いた所で(働いて)。

角 田 うん、それ。畑を耕して作ったり。あとは営林署、国有地の植林だとか刈払い、そういうのを(請け負って)やって。

原 田 このあたりは田んぼというより畑なんですか、稲も取っていたんですか。

角 田 うん、稲も作っていた。

原 田 普通の水田ですか、あるいは陸稲みたいな。

角 田 いや、普通の水田。それから、芋だとか豆だとか。そういう普通食べるもの。自給自足で、うちで食べるものは全部作っていた。

原 田 プラスで開墾地というか、開拓地みたいな所でやったりとか。あと国有林で植林だとか刈払いだとか、いろんな仕事をしていたと。

角 田 ええ。

#### 《写真技術の習得と経費》(11月3日)

原 田 角田さんは写真というのはどこで覚えたんですか。

角 田 習ったわけでなくて。本を読んで実際にやってみて、これは面白いなと。

原 田 最初、おもちゃのカメラみたいなのを買って、ということでしたね。

角 田 うん。箱型で、レンズがちょっと付いて、シャッターはこうあって、(撮影に)何秒かかかる。で、自分で現像したり、焼いたり。

原 田 例えば、写真雑誌を見て参考にしたりはしなかったんですか。

角 田 雑誌は見てはいたが、あんまり(雑誌に投稿写真を)出したことはないな。

原 田 そう言っていましたよね。やっぱり器用なんですかね。普通ね、雑誌なんかを見てもなかなかうまく現像できなかつたりするものなんだけど。

栗 城 天才だ, 天才。

角 田 そんなことはないけども。

与四郎 案外勉強家なの。

角 田 きょうだいもないし, 独りで研究するような性質だったんだな。

北 村 テレビの修理の資格 (テレビ修理技師: 真空管式テレビ修理の資格)  
なんかも, そうすると独学ですか。

角 田 そうそう。

与四郎 本だったべな, あれはな。

船 城 だから, ラジオ (工作) から始まってんだ。

角 田 通信講座なんてあったでしょう。そういうのでやったの。ラジオだとかテレビだとか。ビデオなんかもそうだな。NHKの通信講座なんかあった。そういうので勉強。勉強というか, そんなのでやっていたの。

原 田 角田さんの撮った写真は, 皆さんに差し上げているんでしょう。

角 田 うん。だいたい (村の人に写真を) やってたな。

北 村 写真の現像だとかフィルムだとかのお金は。

角 田 だから, 実費ぐらいはもらっていたよ。ただの人もあったけども, やっぱり全然関係ねえ人からはもらっていたわな。

## 2. 角田の写真の背景

角田の写真は「村」の暮らしのなかで撮影されてきた。特に重要な撮影の機会となっていたのが, 地元玉梨の建設会社である谷ヶ城建設<sup>やがしろ</sup>の業務, 消防団と青年団の活動, そして湯ノ上部落に水をひく「洞門」の管理や治山などの村の仕事と行事であった。

### 2-1. 谷ヶ城建設

谷ヶ城建設は昭和2年創業の玉梨の地元企業で, 戦後になって土木建設業へと事業を拡大, 公共事業を多く請け負って成長した。この谷ヶ城建設への勤務によって角田は経済的に支えられるとともに, 様々な撮影の機会を得ていた。

《谷ヶ城建設概要》(11月3日)

原 田 それで(昭和)39年に、谷ヶ城建設(就職)ですか。これはどこにあった会社なんですか。

角 田 ここから1キロぐらい行ったところ。

船 城 (上中井に)学校がありますよね。あの下のところ。道の広い。

原 田 これはやっぱり村のどなたかがやっていた会社なんですか。

船 城 うん、谷ヶ城力三郎とって。

角 田 この部落の人です。

北 村 働いている人は何人もいたんですか。

角 田 最盛期には150, 160人いたな。土木建築産業も仕事があったから。この辺、災害があったんですよ。(昭和)33年と44年に水害。それで建設業が景気が良くなった。

榎 本 この間(「村の肖像・Ⅱ」2014年で)展示をした写真は、その時の水害ですかね(写真1)。

角 田 そうです。出したのは(昭和)33年(の水害)。44災が大きかったんだけど、それはまだ写真(展)には出てこない。

原 田 まだデジタル化をしていないところですね。しかし、谷ヶ城建設はずいぶん儲かっていましたね。150人もいたと。

北 村 この辺の集落の人たちはみんな。

角 田 そうそう。全部出ていて、働いていた。

船 城 ほとんどやっていた。大部分と言ったほうがいいかもしれない。

原 田 土木というと、水害というのは分かるんですけど……、写真を見ると、あとは上下水道とか排水路みたいなものとかですか。

角 田 ええ、そういうのもやっていた。こっち(栗城)が会社の仕事やっていた。重役だ。



写真1 (TK-P-003-013-012)

- 原 田 それはあれでしたね、すっかり儲かっていましたね、その頃ね。
- 栗 城 儲かったが潰れちゃった。
- 原 田 これは何で潰れたんですか。
- 栗 城 借金よ、最終的には。で、デフレだといったべ。
- 原 田 そうすると、潰れたのは1990年以降ですか。
- 栗 城 6年（前）ぐらいだったのかな。6年か7年（前）だ（2007年破産申請）。公共事業が減ったうえに、結局安くて、もう採算が取れなくなってしまったわい。水害の頃はよかったんだけどな。
- 原 田 でもこの間、あそこ（只見川流域）は水でやまほど壊れたじゃないですか（2011年新潟・福島豪雨）。あれはもう駄目だったんですか。
- 船 城 間に合わなかった。あそこまで（会社が倒産せず）来ていればまだやっていただな。
- 榎 本 2000年代に確か、谷ヶ城建設で賞をもらったりもしていますものね。
- 角 田 賞は何回ももらってる。
- 原 田 賞をもらうって、どういうあれで賞をもらえるんですか。
- 栗 城 それはやっぱり優秀な工事をやったちゅうことで。道路，トンネル……何でもあるな。それから学校とかな。あれも全部前は木造だったから。

#### 《谷ヶ城建設における角田の業務》（11月3日）

- 原 田 谷ヶ城建設，入る時に写真を持って，最初からそういう話だったんですか。
- 角 田 入る時，それはそうだったですね。写真係ということで。
- 原 田 じゃあ，最初から（写真が）得意技だともう村で知られていたから。
- 角 田 そうなんです。
- 栗 城 だって，写真屋なんてそんなになかったから。現場写真出さなきゃなんねえから。現場で撮ってくるのも撮ってくるんだけど，あとは編集こっちで（角田に）やってもらって，全部焼いて。それを今度また（工事アルバムに）貼って，役所へ出さなならんわけだな。そういうことをやってもらった。

榎本 じゃあ、角田さんご自身だけが撮るんじゃなくて、現場の人が撮ってきたものの編集もやっていたんですか。

栗城 現場は現場の人で撮らないと。これ（角田）は分かんないから。

原田 現像もその時おやりになられていたんですか。

角田 白黒は現像からやったけども、カラーになってからはほとんどラボ任せで。

原田 それで谷ヶ城建設、何年ぐらいやられていたのですか。倒産するまでですか。

角田 いやいや、25年で定年退職。60歳で退職して。それがちょうど平成になった時だからな。昭和64年で（勤続）25年になるわけでしょう。（昭和）39年からだからな。でも、退職しても5、6年は属託のような感じで使ってもらっていたんですよ。

北村 急に写真係の人がいなくなると困るわけですね。

角田 いや、本当に会社にはお世話になったんです。

#### 《写真の現像》（11月3日）

栗城 だから、われわれも（写真を）習って。おら、ここの奴さみんな、毎晩来てただ。写真（を習い）に。

角田 暗室作っておいたから。

栗城 おもしろいよ。写真を自分で作るようになると、好きなようにできるから。毎晩来て、ここで寝ないで（現像を）やっていたよ。

榎本 会社の写真もここでやっていたんですか。

角田 いやいや、違う。会社は違うな。

栗城 それは向こう（会社）にあったものな。

原田 こちらの自宅（の暗室）では自分のものをやっていたんですかね。

角田 そうそう。

#### 《就業形態について》（11月3日）

原田 でも谷ヶ城建設の仕事というのだいたい毎日でしょうけど、朝の8時から5時とか6時ぐらいままでですかね。

角田 そうですね。



- 原 田 休みはやっぱり日曜ぐらいですか, 土日休み, そんな感じですよ。
- 角 田 まあ, 日曜祭日。
- 栗 城 前はなかっただ, 日曜 (休み)。
- 原 田 冬はどんな感じなんですか。
- 栗 城 冬は (会社は) やっていないの。
- 榎 本 それは雪でやっぱり (仕事ができなくて)。
- 栗 城 はい。みんな失業させて, 失業保険で (生活してもらっていた)。
- 原 田 そうすると, かたちとしては一回皆さん辞めたかたちにして, それで失業保険であれして, それでまたもう一回再雇用と。
- 北 村 それは毎年毎年。
- 栗 城 毎年。
- 原 田 だいたい12月ぐらいになると退職というか, 終わりということにして。それで (仕事の再開は) 4月, 5月ぐらいからですか, やっぱり。
- 角 田 だいたい4月からだからね。
- 榎 本 冬の間の除雪を請け負ったりはしなかったんですか。
- 栗 城 除雪は, そのずっと後になってだから。除雪なんてなかったから。もう, ただ雪の上を歩いてたから, みんな。春, 3月頃になって初めて除雪が始まるから。県のブルドーザー, それを借りて全部やったから。それから今度は (段々と) 解雇を, やっぱりしられねえような世の中になってきたから。ほんで, それからは一部の人だけ雇っておいて, 冬を通してやっていたんだよ。雪の降らないほうへ出てたから。大熊 (福島県双葉郡大熊町) とかあっちのほうに出てたから。
- 北 村 出稼ぎなんかはあまりこの辺はされなかったんですか。
- 栗 城 いや, 出稼ぎに行っていたよ。東京のほうへ行っていた人がいっぱいいる。
- 角 田 私は行かなかった。
- 榎 本 角田さんも冬の間は (谷ヶ城建設の) お仕事はしていなかったんですか。
- 角 田 冬の仕事っても, そんなにはないからな。失業 (保険) もらっていた

のよ。

原 田 もらってればね、べつに無理して（出稼ぎに行かなくても）ね。大変ですものね、出稼ぎはね。

栗 城 大変だ。なんといっても、ここの冬は一番大変だ。

《谷ヶ城建設での撮影について 工事写真・旅行写真》（11月3日）

榎 本 角田さんの（個人的な）写真（アルバム）の中にも、工事の写真がけっこうありますけど、これは会社で撮ったものなんですか（写真2）。

角 田 いや、会社側で撮るのは別だけでも、自分のカメラでも、たまに（現場に）行った時は撮っていたのもあるの。



榎 本 会社は会社で撮っていて、これは角田さんの個人的な。

角 田 そうそう。

写真2 (TK-P-004-003-32)

\*

原 田 谷ヶ城建設で旅行もずいぶん行っていますよね。毎年1回ぐらいは行っていたんですか。

角 田 ええ、毎年1回ぐらいやっていた。

原 田 ものすごい皆さん楽しそうに。

北 村 はじけた感じで。旅行にも角田さんは毎年一緒に行っていたんですか。

角 田 旅行に行く時はほとんど付いて行って撮っていた。ビデオなんかも撮ってはありますよ。

## 2-2. 消防団

《ポンプ操法競技会》（11月3日）

角 田 消防団は前にポンプ操法競技会というのがあって。町で予選を通ったら両沼に行って、県大会まで行って優勝したことがあるんですよ（写真3）。これも（栗城）やったことがある。

栗 城 優勝できなかった。

角 田 これ（栗城）は優勝はしなかったが、その前に行った人が優勝したんだな。（競技会では）時間と態度だとか、そういうのが採点になって。福島県大会で優勝したことがあるの、玉梨班が。



写真3 (TK-P-003-019-20)

《消防団活動と組織について》(11月3日)

原 田 消防団って、普段はどんなことをやっているものなんですか。

角 田 やっていることって、べつに。いったん関係があった場合出動するだけで、(普段は)何も特別なことはやっていない。

原 田 消防団でいつも集まって酒を飲んでいるのかなと。

栗 城 昔はそうだったの。昔は飲み会だけだった。何をやっても飲み会があったの。

船 城 今は24日に一度、招集で。

角 田 消防の日というのを決めて、防火活動なんかをやって。

船 城 サイレンが鳴って、忘れてたまげた。

北 村 消防団には男性は皆さん入っていたんですか。

船 城 入っていたよ。

与四郎 昔は競争あったんだべ。どこかの部落は20名より減らさないとか。

栗 城 町で何名って決まっていたから。

《消防団の旅行と角田の撮影について》(11月3日)

榎 本 消防団でもけっこう旅行に行かれていますよね。バスの中で消防団の法被を着て、楽しそうに宴会なさっているのが写っていたから。

栗 城 そんなのがあった？

原 田 ありましたね。これは会社のあれじゃないなという。

角 田 消防団の班長かなんかが撮ってきたのをこっちにネガを持ってきたから、それを預かっておく。そういうのもあるんですよ。

榎 本 角田さんのところにある写真は、全部角田さんが撮影したわけでもな

くて。

角 田 そうでないのがあるんですよ。カラーの場合整理しているんだが、(ネガ整理のエクセルファイルを見せて)こうやって色が付いたのは自分以外の人が撮ったネガなんですよ。

原 田 海外旅行とか。

角 田 うん。そういうのは自分が行ったんじゃないが、ネガを保管しておいてくださいということで、頼まれてやったの。

### 2-3. 青年団活動

#### 《青年団活動の概要》(11月3日)

原 田 若い時は男女一緒なんですか、青年団。

角 田 そう。

栗 城 だから青年団で結婚しているんだよ、みんな。

角 田 終戦の頃は男は召集されていなくなったでしょう。女ばかりいっぱい。だから自由に(結婚相手を選べたのな。

栗 城 だからその青年団つって、今度は夜、会議が始まるでしょう。そうすると温泉にみんな来て、温泉に一緒に入ってな。みんな背中をこうやって流したり。

角 田 それが好きだった。男女混浴だから。それが自然だったからな。抵抗を全然感じない。

原 田 いいですね、最高じゃないですか。

栗 城 今だって抵抗はねえわいさ。おら、混浴でねえと入らないわい。青年団は大活躍だったんだ、ほんと。

角 田 終戦直後の頃なんか200人ぐらいいたもんだ、青年団てのは。1軒に2人か3人くらいずつ(青年団員が)いたから。

北 村 青年団は大字(単位)で(活動していたのですか)。

角 田 おう。八町(野尻川対岸の部落で、同じ字内ではあるものの、普段の行事などは湯ノ上側の他の玉梨の部落とは別に行っている)も入っているの。八町と玉梨。学校が同じだったからな。

原 田 それは楽しいですね。みんな大所帯で。

角 田 (大所帯すぎて) 風呂に来てても (一度には) 入れないから。(風呂が) 小さいからな。だからみんな、今度は橋の上なんか待っているわけだ。最初の、先に入った人が上がってこないと入れねえ。

《青年団活動と写真》(11月3日)

榎 本 じゃあ、橋の上で若い人たちが写真を撮っている、あれは青年団の集まりなんですね(写真4)。

栗 城 そうそう。青年団の会合が終わると必ず風呂さ行つて。

榎 本 みんなおしゃれをしているのは、楽しい集まりだから。

栗 城 おしゃれをしねえと(結婚相手に)選ばれねえから。



写真4 (TK-P-001-009-09)

榎 本 そういうことだったんですか。橋の上でみんなおしゃれをして写真を撮っているのは、いいロケーションだからそこで撮ろうみたいなことなのかしらと思つたら、そういう事情。

原 田 面白いですね。じゃあ、週に1回とか集まる日があったんですか。

栗 城 週に1回はねえな。月に2回くれえだな、あれあったの。あと盆踊りってあったのね。盆踊りは、その鹿島神社ってあったとこの境内で盆踊りだったの。そうすると、それももう本当に大勢集まって。

与四郎 だなあ。多いだな、あそこは。広場があんだけど。

栗 城 そこもやっぱり(男女の)憩いの場に。

北 村 盆踊りってそういうものですよ。

榎 本 盆踊り(の写真)でも皆さん、本当におしゃれをしていますよね。

《青年団と旧青年団》(11月3日)

原 田 青年団というのは、結婚したらまた別の団体に変わるんですか。

角 田 いや、結婚しても一緒にいる人もあるし、やめる人もあったな。

原 田 組織としては青年団って何歳ぐらいになったらやめるっていうのは決

まっているわけじゃないんですか。

角 田 決まっているわけではないが、やっぱり25,6（歳）まではいたな。

栗 城 そんな、それ以上が今度は旧青年団って。新青年と、旧青年団とあったわけ。それは、歳を取ったとや、旧青年団に（加入する）。

榎 本 旧青年団はわりと歳のいった人まで、という。

栗 城 新青年団は、学校が終わっても……昔のことだから中学校が終わっても、ここに残っている人はそうやって入っていたから。

《演芸会・バンド活動》（11月3日）

榎 本 あと、演芸会みたいなのをよくやっていましたよね。あれも青年団の。

角 田 娯楽って何にもないから。青年団が自分たちで考えて、練習して。それを喜んでもらっていたの。1年に1回。

栗 城 1カ月練習だものな。

角 田 娯楽って何もなかったからな、それが楽しみだった。

原 田 バンドじゃないけど、音楽みたいなのもやっていますよね（写真5）。

角 田 それも何人かでやっていた。

（与四郎が）バンドマスターだ。

与四郎 今はこっち（栗城）と2人だけでいるんだけど。あと、水の事故なんてあったから、何人か団員が亡くなったのよ、その時。それからやめちまったけど、その前はちょっと、やってみたこともある。



写真5 （TK-P-004-055-10）

原 田 曲はあの頃だと何をやっていたんですか。

船 城 あの頃っていったってだいぶ長い（期間だ）。

与四郎 だいたい流行歌だが。三橋美智也とか、ああいうのをやって。

原 田 楽器の練習から全部やっていたんでしょう。

角 田 うん。

栗 城 毎晩、毎晩（小学校を借りて練習を）やっていたわい、ほんと。

船 城 楽器, 太鼓なんかもあったものな。  
栗 城 (バンド活動用の) スーツもあんだ。ネクタイも。お揃いでみんなで作った。女ばにモテただモテただ。もうすごかったんだから。(隣村の) 昭和さに行った時なんか。体育館に入り切れなくて, 外からみんな戸を開けて (演奏を見ていた)。

与四郎 録音機かけてるんでねえかなんて言われてな。若い時に。  
栗 城 ここら辺, バンドなんてやっている人いなかったからな。  
与四郎 あれからずっとできやったけどな。今は役場あたりでやっているのがあつだよな。NHKのど自慢ではないが, 金山町のはじっぺの部落でのど自慢なんかやったことがあるんだけど。いや, 大したものだなと言われてな, おらたち行くと。(他のバンドは) やってねえから, (他の演奏を) 見てねえから。(演奏を) 間違っても大丈夫だわい。

船 城 楽団に名前があつて, 「バイオレット」という。  
栗 城 その前は「すみれ」。  
角 田 一番最初は「みずほ楽団」な。  
榎 本 後ろの幕も作られていましたよね, 「バイオレット」とか「すみれ」って書いてある凝った幕が (バンドの) 後ろに (写真6)。

栗 城 「すみれ楽団」なんだべ。それが最近になって「バイオレット」にした。

与四郎 振り返ってもあれだな, やっぱ昔はいいな。

栗 城 いい。昔はいい。

原 田 でも, そういふのってどこで習ったんですか。見よう見まねなんですか。

与四郎 学校で習ったぐらいだから。中学とか……高校では習わねえか。だいたい中学くらいのもんだっぺな。

栗 城 この人 (与四郎) がほとんど分かっていたから。教えてもらって。



写真6 (TK-P-004-055-26)

与四郎 いろいろあったけどな。

栗城 どうやってやるんだっかって。(練習は) 厳しかったから、ほんと。

原田 でも、音楽なんかどこかで勉強しないとなかなか難しいんじゃないですか。

与四郎 ほかにはできねえ。やったことねえから。やっぱりそれなりにやっていた。みんな、何人か組んでやるんだけれども最初の頃は合わなくて。

《青年団による芝居公演》(11月3日)

与四郎 それ(バンド)と別に、また青年団では芝居をやっていたんだよ。ここだと喜四郎芝居なんて有名な芝居があるんだよ。そういう劇団とやって見せていた。毎年やっていただよな、あれ。

栗城 大変だったな、舞台を組んでな。

北村 舞台はどこに組んだんですか。

栗城 学校、小学校の校庭に組んで。それが大変だったんだよ。

与四郎 一本杉で一本一本組み合わせて作って、でっかいのを。

船城 みんな手作り。(喜四郎芝居の)小栗山喜四郎っていうのは、ここの一揆の芝居。確か、魚沼が絡んで(一揆を)やったはずですよ。あと、よく出たのが天野屋利兵衛、あれだ、忠臣蔵の。

与四郎 (小栗山という)部落があるわけだ。ちょっと行ったとこに。

栗城 スキー場(かねやまフェアリーランド)の部落よ。あそこの小栗山って言って、でっけえ石碑があるな。

船城 石道丸も何回かかけたよな。石道丸って高野山さ行って、荊萱堂の話。

原田 ここはやっぱり昔から音楽とか、芝居が盛んなんですか。

栗城 何もなかったからな、本当楽しみっては。

船城 どうも会津盆地よりも盛んだったみたい。つまり、なんでかというところ、統制が弱かったんだよ、ここ。御蔵入(金山は幕府直轄地の南山御蔵入の一角である)だから。どうも会津藩でも(芝居は贅沢だと)締め付けたんだが。

原田 (会津の支配が及ばない分)やりやすかったんでしょうね、いろんなことが。



船 城 そんなあれがある影響というか、その流れでわりと好きだった。  
栗 城 何も楽しみがなかったから、そういうのをやって部落の人を楽しませて  
          ていただよ。年に1回、もう決まっていたから。

船 城 だから、神楽は必ず1回来たのね。

《旧青年団による買芝居》(11月3日)

角 田 旧青年団の人(買芝居は青年団を卒業した旧青年団が担当していた)  
          が劇団だとか芝居だとかを買って見せていたのが1年に1回。

原 田 (劇団を)呼んだんですか、そうすると。

角 田 (劇団を)呼んで。そういう経費は全部旧青年団ということで。

原 田 どういうあれでお金を集めたんですか、それは。

角 田 結局、(来客が持ってくる)花(=祝儀)なんかがあるでしょう。そう  
          いうので別に青年団(の資金)から出したということはないのな。けっ  
          こう(客が)買ってくれるの。金はかかったからな。

栗 城 金はかかったわや。玉野司(戦前から活動していた玉野司ちゃんばら  
          劇団)なんて来たがや。(会場には)篤志寄付で祝儀って書いてな。

原 田 誰々いくら、誰々いくらって、あれですよな。

栗 城 そうすると、お互いいっぱい(寄付を)あげるようになるの。あれに  
          負けてられっかなんて。

角 田 旧青年団がやるんだったら頑張んなきゃなんない。だから、何とか採  
          算は取れてはいたんだよな。

船 城 だいたい回るんだもの、寄付を集めに。

角 田 そうだよ、足りねえ時は回るしかなかっただ。

与四郎 (寄付金が)間に合わねえ時もあったよ。例えば芝居を買ったとした  
          ら、足りなくなって。やくざと同じだわい。「これに負けろ」と、こう  
          いうようなことで(劇団と交渉して)負けさせたこともあるんだが。玉  
          野司だ、なんだかんだって劇団はいっぱいあったからな。こっちに  
          入ってくるのが。

栗 城 玉野司なんて、うち的小屋さ泊まって。

船 城 このところ(栗城の土地)に舞台を作ってやったこともある。

## 2-4. 村（部落）での仕事 — 洞門管理を中心に

角田の暮らす湯ノ上部落では、「洞門」管理が山林管理とともに村の重要な仕事のひとつとなっている。山の中腹に位置する湯ノ上では川の利用が難しく、かつて稲作は小規模にしか行えなかった。その状況を打開するため、角田の祖父、長太郎が大峯山を超えた白沢川上流の高野沢から湯ノ上に水を通すために開いたトンネルが「洞門」である。「洞門」の水は現在も町営水道が通らない湯ノ上の灌漑用水、生活用水として利用されている。

### 《洞門掘削》（11月3日）

北 村 いつ頃ですか、その洞門（が作られたのは）。

角 田 百何十年か前（1887〔明治20〕年着工、1901〔明治34〕年完成）に掘ったんですよ。それこそ長太郎さんが掘っただから。

栗 城 いや、ほんと、行ってみると大したもんだ。

ノブ子 今だからできねえぞ、あんなことな。

角田・栗城 できねえ。

ノブ子 そんで、今度は勝兄（＝角田）たちが若え時（終戦直後）、その洞門の長さ、ヒューム管入れっちゃうんだからなあ。土管。あれだってできねえぞ。昔だでやったが。

栗 城 今だからできねえわい。

### 《水の配分》（12月7日）

原 田 （洞門を通じて引いた）水の配分というのは、どこで決めているのですか。

角 田 それは湯ノ上部落で決めている。

原 田 やっぱり田んぼとか畑の量とか、そういうので。

角 田 その量で、半分半分、それから四分六分とか。その水のかかり口に、沢の分かれたところに仕切りをしてしてやっているわけなんだが、それもなかなか守られてねえ時があるのだ。我田引水というか、自分のほうに引っ張りたい人もいたから。

原 田 雨が降って水が豊富にある時にはいいのだろうけど、そうでない時には。

角 田 少ないときは大変よ。けんかになる時もあるの。(仕切りを)ぴったり止めちゃって、(水を)自分の田に入れたりする人もいるからな。下の人が困るね。

原 田 それはまずいじゃないですか。昨日(の御八日講の宴会)みたいにみんな仲良く酒を飲んでいるのに、そんな時になったらひどいじゃないですか。

角 田 けんかになる時があるんだ。

榎 本 そういうのを決めるのは、部落の会合みたいなものがあるんですか。

角 田 総会(坪総会=湯ノ上部落の総会)で決めるわけ。

《洞門管理》(12月7日)

原 田 年に4回ぐらいでしたっけ、(洞門の)ごみ取りというか。

角 田 そうですね、沢のかかり口に行って。けっこうあるんだよ。車でだいたい2キロぐらいかな。それから歩いて1キロぐらい。

原 田 おじいさん(角田長太郎)かなんかが中心になってやられていたのですか、その穴を掘るのは。

角 田 そうなの。昔は大変だったみたいだな。

北 村 手堀りですかね。

角 田 うん。手堀りで。これは請負師に請け負わせてやってもらったんだけどな。管理が大変だったな。坑木、木で柵を組んでやっているわけだが、木なんかすぐ腐っちゃう。10年ぐらいで交換しなきゃならないから。

原 田 トンネルも大変ですけど、排水路というか、ずっと下まで(水路を)通しているわけですよ。それも相当作るのが大変ですよ。

角 田 ほんだな、大変だ。その管理が大変なもの。でも、やらないとしょうがねえからな。水がないんだから。(水がなければ)生きているわけにいかない。

榎 本 元はどこかの湧き水かなんかから引いてきて?

角 田 いや、沢の水。沢の水を、横堰を1,000メートルぐらい引いて、そこから洞門にして。洞門が300メートルぐらいあるのかな。

原 田 300メートルはすごいわ。

角 田 昔はうちらでも（洞門の）中に入って管理したんだな。ヒューム管を入れる前はな。だから大変だった。それも真っすぐでねえんだよ。中になんか大きな岩があると、こう曲がっていたりとか。昔の人はよくやったものだ。両方から掘って、ちゃんとぴったり合ってたんだからな。それにみんな、真っすぐでねえ、へごへご曲がっていて、よくやったと思うよな。

北 村 水が流れるようにね、ちゃんと傾斜も。

角 田 だから、（両側から掘ったトンネルが）合うのは合ったが。上から掘った人はちょっと低く下がる位置にやったわけな。それが、今度はこっち、出口から掘った人は上り気味にやって、その段差が2メートルぐらいあるのな。よくやったもんだと感心する。水とろうそくの光のようなものでやったらしいのな、測量を。レベルを見るものがあるわけだ。ねえからな。

《洞門完成以前》（12月7日）

原 田 洞門完成以前というと、川から水を汲んできたということですかね。この辺は井戸を掘っても出てこないですよ。

角 田 出てこないです。ただ、小さな清水くらいはあったからな。飲料水くらいは何とかあった。清水の水だけで、少しの田んぼはあったが、それでは駄目だということで洞門を掘って、それから田んぼが何町歩か増えたわけだ。そうでなかったらここに生きていくわけにもいかないような状態だな、ほんとに。

雄 司 この辺なんかいくらも田んぼがなかったと。だから、食べていくほどあるわけねえわい。そして今みたいに肥料があるわけだ。ねえだし。それこそ動物を飼って、その（糞を）堆肥にしたり、草を刈って堆肥にしたり。んだから、（沢山）採れるわけねえだよ。全部それも手（作業）だからな。

北 村 今はこの辺（の田んぼ）は、機械は入るんですか。

雄 司 機械は入る。そんな大型はできねえけども。（湯ノ上は）地滑り地帯だ

から制限があるのよ。何メートルカットで何メートルまで盛土だとかって。だから、そのできる範囲で。よその村は1田んぼ1枚とか2田んぼ1枚とか3田んぼ1枚とかって区画ができるんだけど、おらほは田んぼによって全部違うんだ、面積が。で、元のあれを利用して、3枚を1枚にするとか、5枚を1枚にするとか、そういう感じでやった整地だから、よその整地とは違うだけ。けどな、けっこう大きくなったから、ずいぶん楽になった。前は全部手作業だったけど、今は機械でできるから。

北 村 (昔は) せいぜい写真にあるように、牛か馬かを使うぐらいですよ。雄 司 そうそう。牛か馬が入る田んぼのあるうちはいい方だな。みんな手だもん。昔の笑い話があるんだ。 (田んぼが)100枚とか108枚とかあったけど、それをなんぼ数えても1枚が足んねかった。したら、自分がよけたらそこに1枚があった。ここら(ちゃぶ台)ぐらいの田んぼがあったらしいから。笑い話にもなんねえけど、ほんと。だからそんなところで食べ物なんて、そんなできるわけねえわいな。それと、子どもはいっぱいいるんだしや。どこの家族だって8人、9人はいるんだから。それ、全部食わなんねんだから。

## 2-5. 年中行事・宗教行事

玉梨字、湯ノ上部落では、上の洞門管理をはじめとした村の仕事とともに、それぞれの共同体単位で行う年中行事や「講」をはじめとした宗教行事をまとめた一覧表が作られている(原田論文中の図5参照)。各行事は字、単独1部落、複数部落合同と行事ごとに位相の異なる共同体によって担われており、字、部落(=坪)行事表にも複雑な重複が見られる。なお、子供のための天神講など、近年は行われなくなった行事も多い。

### 《年始会》(11月3日)

与四郎 はじめって行って年始会ってあるんだわい。(年始会で)川上(野尻川上流の部落)の一番初めからここまで来ると、だいたい人は潰れちまうんだな。雪道で。

- 角 田 1軒1軒まわっていたんだな。だから大変だったんだ。
- 与四郎 昔は飲めたから。1軒1軒まわって、飲んでくるわけだよ。長靴ってあんまりねえ頃だべから、藁沓を履いてこっちのほうに上ってくるわけだが。そういう時代もあったの。こう歩いてやっていたような、なんちゅうか、穏やかちゅうのかな。冬道だと一本道だからな。
- ノブ子 今は一日に歩かねえことになったからな。ほんと楽でいいの。やったらねえものな。
- 北 村 (今は元旦の家々をめぐる行事が) 禁止になったんですか。
- 船 城 なった。
- 与四郎 ひどいやつなんかな、温泉に行って酔っ払ってきてよ。着物着たまま(温泉に)入って行って。そこの娘さんがたまげたって話しよ。(服と)一緒に入っちゃうんだから、風呂さ。
- ノブ子 あの頃は重労働はさがなかったけれども、確かに男の人たちなんかは、そうやって部落歩いたり、人との付き合いがあって、今よりは楽しかったんじゃないかと思う。今はそういうことはまったくねえから。
- 与四郎 変わったなあ。中身が変わったもんな。近所も都会と同じだよな、近所もねえけども、それに近いようになったものな。

《御八日講》(11月3日)

- 北 村 (講では宴会を開くと聞いて) これ(御八日講)も宴会ですか。
- 栗 城 それも結局は信仰だな、(講は)みんな信仰よ。
- 北 村 この講はだいたい皆さん、全部のおたくが入っているんですね。
- 栗 城 そう。それで、八日講ってのは湯ノ上部落とうちの部落(西中井)、一緒にやるわけ。
- 船 城 各部落に(講が)あったかと思うけども、あんまりやらなくなっている。
- 北 村 船城先生のお住まいは。
- 船 城 上中井。上中井は比較的(講を)省略しちゃってる。
- 栗 城 おらほは省略しようがねえだものな。(2つの部落が)一緒になってい

るから。単独の部落などは省略してもできるんだけど、やっぱり2つ一緒になっちゃうと省略できないんだよ。そしてまた、こういうのがいいんだ、本当に。

《古峰ヶ原講》(11月3日)

- 角 田 古峰ヶ原講って、火の神様ということで信心して。
- 船 城 日光辺りにある(古峯神社)。北関東では有名なんだ。
- 原 田 これはどこの部落ですか、やっぱり湯ノ上と。
- 角 田 山ノ神講は部落単位だな。一緒にやったことはないな。みんないろいろあるんだい、講元でな。山ノ神講は部落単位。御八日講が2つの部落。飯豊講は4つの部落だ。
- 北 村 飯豊講はどこなんですか。湯ノ上と。
- 栗 城 西中井, 上中井, 東中井と。
- 榎 本 かなり大きいですね。(講の会場は) だいたい旅館玉梨ですね。
- 栗 城 結局ここの坪内(=部落内)だから、そうなっちゃうのよ。(坪の)中の旅館だから、(旅館玉梨を) そうやって使う他ないのよ。
- 船 城 (現在の玉梨字は川上, 上中井, 西中井, 東中井, 湯ノ上, 八町で構成されているが) 川の向こう(八町) はまた、本当は村が違う。東中井と上中井が一村になってる。で、ここと、湯ノ上と西中井とが一村なの。
- 北 村 それはいつぐらいですか、村が一緒になったのは。
- 船 城 明治。で、なんか変なことになっちゃっているんだよ。ここ(湯ノ上など)と川上というのが部落が違うけど、村が一緒なのかどうかというのはよく分かんない。玉梨, 川下ってこっち。川上が今の川上。名主がいたりいなかったりというような感じだ。だから共有のあれは、川向こうは違うの。
- 原 田 川があると、橋がないと行き来できませんからね。橋を造るのもけっこう大変ですものね。写真に橋を造っている最中のをよく写していますけどね。
- 榎 本 しかも水害のたびに橋が流されるんですよ。
- 角 田 うん。

《かつての講について》(12月7日)

原 田 (講の開催は平均して) 1カ月に1回ぐらいなのですか。

角 田 ええ。

原 田 (講の会場は) 昔は家々をまわっていたのですか。

北 村 順番で、今年はじゃあどこのうちでということで集まって。

角 田 うん。それが大変になったから。だから旅館でやるようになったのかな。

原 田 昔は家で用意してやっていたという感じですか、そうすると。

角 田 ええ。その頃はもう、ちゃんと順番が決まっているから。来年はうちだなんていうと全部支度したり、うちを改築したりなんかして。多いときは40人以上が集まる時があったからな。飯豊講なんていうのはな。

コマノ 昔の年寄りや宵の日から集まって、泊まってやっていたんだ。娯楽もないしな、それが信仰でやっていたんだけども。一升ぐらいお米をみんな持って行って、その宿のうちでついて、餅を食べて。昔の人はそれが務めだと思って、大変でもやったからな。それが戦時中、一時やめになって。それからだんだんに泊まりがなくなって。それでも家庭でやっていたのな。もちまわりで。田舎の人はそういうことしか。

角 田 楽しみがないからな。

《先達と拝詞》(12月7日)

北 村 昨日(の御八日講で)最初に皆さんがお参りしているときに、先頭で声を始めた方がいらっしゃるじゃないですか(写真7)。

角 田 「先達」といって、その人に付いて一緒にやるわけだ。

北 村 あの方はどういう役目の方なのですか。

角 田 べつに大した何もねえが……。

榎 本 いつも決まった人というわけじゃないんですか。

角 田 そうでねえの。決まった人では



写真7：御八日講(榎本撮影)



ないんだ。世話人が顔ぶれ見て、「この人がよさそうだ。おまえ、やってくれ」なんてやるわけ。

北 村 (お参りの)言葉も独特でしたね。あれは毎回節が決まっているのですか。

角 田 そうなんですよ。「あーやに あーやに くすしく尊つと 月山神社の神の御前を拝みま一つ……」と。ああいうことはやっているのだな。

北 村 意味は分かります? 「あーやに」という。

角 田 なんととも……。ありがたい神様だとかなんとか、そんな意味かな。

### 《観音講》(12月7日)

コマノ 昔は(講の参加者は)おじいちゃん(角田)みたいに歳を取った人、男の人だけだったの。今はノブ子さんみたいな旦那さんを亡くした人は、1戸から1人だけ(女性でも参加する)。

北 村 女性だけの集まりみたいな(ものはないのですか)。

コマノ 女性だけは観音講ってやった。それも今の時代になってやっぱりあちこちでやめになって、ここだけが何人かであつないではいるんだけど。今は3月の末に1回だけになったの。

原 田 婦人会みたいにして、女性だけで集まる機会というのはあんまりこの村ではないんですか。

ノブ子 うん(観音講だけ)。(かつての観音講は)村中で13人ぐらいたんだけど、今なんと、5人になっちゃった。それでもやめねえでやっているの。昨日(御八日講で)やったように、あそこ(会場の床の間)さハレの日の観音様の掛け軸をかけて、それを拜んで。ハレの日のあれはわれらで唱えて。観音様はこれ、1時間はかかるから、鐘ぶって。

北 村 昨日(の御八日講)みたいに簡単じゃない?

雄 司 昨日みたいなんか。(御八日講も)今なら簡単だけど、昔はけっこうあったらしいよ。今は略してんのよ。

ノブ子 昨日やったものはよ、昔は3世帯あったべ。一番年寄りのじいさまみたいな人が出て、泊まってやったんじゃねの、最初。

雄 司 そうだよ。水垢りとしてやってた。あれは泊まりがけで餅をついて

やっていたっただ。昔は信仰が深かっただよ。

北 村 信仰が深かったのか、宴会が好きだったのか、どちらか分かんないですけど。

雄 司 いや、それが。1日休んでやるのが楽しみだったべ。

## 2-6. 奥会津の暮らし

### 《雪下ろし》(11月3日)

北 村 この辺だと雪下ろしはどのぐらいの頻度で下ろさなきゃいけないんですか。

角 田 今はほとんどトタン屋根だから落ちるけども、火を燃やしていない神社みたいなどころとか、そういうところは下ろさないと駄目だから。落ちないから。1mぐらい積もったら下ろさないと危ないから。

北 村 年に3回ぐらいですか。

角 田 その年で違うからな。平均して2回くらい。

ノブ子 今年(2014年)はすごくやっただよな。

角 田 今年は、去年だけか、(雪で)潰れたのな。鹿島神社の社務所。

栗 城 あれはもっと前だ。3年くらい前だ。

北 村 今はもう頼んじゃうんですかね、雪下ろしは。

角 田 頼んでやっている。今はもうみんな年を取ってな、無理になったからな。屋根になんか上れねえわい。

栗 城 落ちたら大変だから。

角 田 でも、昔はやっていたの。

北 村 それは自分の家のものを。それとも、よそのうちも手伝ってとか。

栗 城 自分のうち。他のうちなんか手伝いようはねえんだわ。自分のうちが潰れそうなんだから。

角 田 前は、トタン屋根になんねえ頃なんかは大変だった、ほんとに。草屋根の頃は、4回ぐらいやったな。もうほとんど雪始末ばかりだから。

### 《トタン屋根への葺き替えと家の建築について》(12月7日)

榎 本 トタン屋根を葺いたんだらうなという時の写真がありましたけど、だ

いたい昭和30年代ぐらいですか  
(写真8)。

角 田 そうだな, 30年代か40年代だな。

原 田 あれは, 家は皆さんで建てたんですか, それともあれも大工さんに頼んで。建前の写真がよく写っていますよね。



写真8 (TK-P-003-059-05)

角 田 うん, 大工さんがやった。

原 田 じゃあ, 屋根を葺いたりとか, ああいうのはもう。

角 田 うん, 全然。商売人にやってもらって。自分ではできないから。

《山ノ口》(11月3日)

原 田 「胡桃落とし山ノ口」とは。

角 田 前は胡桃も大切な食べ物だから, その日にならないと落としてはいけませんよ, という決まりがあったんですよ。今はほとんど関係なくなったんだな。胡桃なんか採る人, 拾う人, なくなったから。

栗 城 (他にも) 茅山ノ口, 萩山ノ口 (というのがある)。

角 田 その日でならないと採られないというような決まりになったんじゃない。今はほとんど関係なくなったな。採る人もなくなったからな。

栗 城 結局それを決めておかないと, いつでも行って誰でもやっちゃうから。それを決めておくと, それ以前にはやらないということだから。

北 村 解禁日ですね。

与四郎 萩に行く時は暗いうちに行って始めるわけだ。みんな競争だから。

栗 城 朝飯持って行って。だいたい決まってっからな, 自分の刈るところ。

与四郎 行くのは早かっただ。高い山のとっぺんのほうだから。

角 田 おらっちは行かないけどな。

船 城 萩はあれ, 肥やしにするのかな。

栗 城 飼料, 飼料。牛とか馬を, みんなが家畜をいっぱい飼っていたんだもん。

《家畜》(11月3日)

北 村 (村で飼う家畜としては)牛と馬とどちらが多かったんですか。

角 田 牛が多かった。綿羊だとかヤギだとか、そういうのを飼っていた。今はほとんど、ほとんどというより、1匹もないんじゃないか。

栗 城 今はウサギもいねえわい。

角 田 犬が少しいるぐらいで。

栗 城 鶏もない。鶏だってな、貴重だったから。卵を取るには。俺だってなあ、(鶏が)20(羽)ぐらいいたべぞ。嫌だったわい、朝に草刈り。「おめえら草刈ってこい」なんていわれっちな。「学校さ行く前に行ってこねえと、学校さ行くことない」なんて。今とは違う時代だから。

北 村 餌の草ですか。

栗 城 そうそう。それをやって、うちの掃除して、それから学校へ行けと。じいさまがな、厳しかったから、そっで。

与四郎 動物が多いから、田の畔でも何でもやたらに刈らなかつた。今はみんな刈ってくろって言っているけど。昔は貴重品だから。

榎 本 それが餌になる。

栗 城 そうそう。全部乾燥させて、それを今度は冬の餌に、全部うちの2階に上げて。そうやって管理していたのな。

《狩猟》(12月7日)

原 田 ウサギやなんか、写真で撮っているのがありましたけど、そういう猟みたいなのはやっぱりはしないんですか、こちら辺は(写真9)。

角 田 あったんだが、今はほとんどやる人がなくなつたんだな。猟師に鑑札がいるからな。なかなか大変だから。今は何人かいんのかな。

雄 司 なあ、町内に何人かだな。

角 田 うん。少なくなっちゃった。

北 村 昔はいっぱいいたんですか。

角 田 昔はいた。



写真9 (TK-P-004-050-03)

- 榎 本 角田さんたちもされたんですか。
- 角 田 いや、俺はやらない。うちの父（弥一）なんかはやったが。
- 原 田 どっちかというと猟のほうがメインだったりののですかね、昔は。
- 雄 司 それもあったべな。毛皮を売ったりな。
- 北 村 冬ですか、猟というのは。
- 雄 司 冬だけ。
- 北 村 猟で撃つのはやっぱりウサギとか。
- 角 田 そうだな、ウサギ。
- 北 村 テンとかいるんですか。
- 角 田 いる。
- 雄 司 穴の中べ。罌をかけただべ。ウサギだって罌をかける人もあったからな。針金で捕るってたら、ウサギなんだわ。鉄砲もやったべが。
- 原 田 鳥網なんかはやっていたりしたんですか、この辺は、網は。
- 雄 司 網はねえよな。針金みたいなのをかけてやってたんでねえの。
- ノブ子 今頃になると、ウルシの木あるでしょう。あのウルシの実さ、ヤマドリが来るの。朝早く、夜が明けないうちに。そうすると、それを目がけて鉄砲を持ってくるの。うちのお父さんなんか、ひと朝に5羽も6羽も取ってくるけど。昔はね、ここに来たばかりの時は鉄砲撃ちなんていっぱいいたの。八町と玉梨で7, 8人はあの頃はいたの。だから、ここさでっかい鍋さ、5升のなんちゅう鍋さ、大根だとか芋だとかいっぱい煮て、そんで飲むかとやるのよ。ここ、囲炉裏だったから。秋の頃になると、うちの田んぼの上の方さいくと、(ヤマドリが) バタバタ来る時あんだけんど。今は昔みたいにいねえなあ。
- 原 田 イノシシとかあいうのは、こっちはないんですか。
- 雄 司 いや、今はいんだよ。イノシシっちゅうか、なんだ、あれ。カモシカだとか、ああいうの。
- ノブ子 イノシシってこう、鼻が尖ってるんだろ。それはあまり見たことがない。
- 雄 司 ほんだば、昔はカモシカはいたんだか。

ノブ子 昔はいなかったな、今みたいに。

雄 司 今はカモシカがどこからか来るんだから。あれ、木の芽だとか稲も荒らすから。作物を荒らすからよくねえだよ。猿よりはいいかもしなけれど。

北 村 猿も出ます、この辺？

雄 司 猿、出るの。猿もだが、猿、熊。それから、狸なんて昔は来なかったんだ、ここさは。今はどこのうちも山荒らしてんだ。だから今度は山にいる動物が下さ、下りちまったのよ。こっちに来ると食べ物がいっぱいあるんだもの。山さには行きたくねえわ。

北 村 人間の食べるものがたくさんあるから。

雄 司 だば、今ものすごい増えてんだ。今は昔みてえに猟ができないしな。それから期間が決められっちだべ、あれ。

ノブ子 鉄砲の鑑札を取っている人たちで、ひと冬に3回ぐらいマルガリってやるんだ。それをやると、やっぱり捕ってきたよ、ウサギを。ウサギも今頃はおいしいだよな。それして飲むのが楽しみで。みんな集まるからな。昔は牛肉なんて、この辺ではあんまり食べられなかったから。もう、冬になったらウサギ汁。

雄 司 ウサギうまいぞな。癖がねえし。牛って嫌いな人もいるんだよ。特有の匂いがするしな、あれ。今は食べ慣れてっから分かんないだっぺだけども。みんな綿羊、ヒツジとかヤギとか、馬とか牛とか鶏、食べるがんに飼っていたんだもん。馬だとか牛は働かせんがんだけど、あとちっちゃい動物はみんな食べるがんだもの。

ノブ子 うちのじさま、私のしゅうとは馬喰をやってたの。馬は手にかげらんなかったけど、牛。自分のうちにも飼っていたし、ここの辺だってほとんどのうちはそう。馬喰で若松の屠殺場、そこさ（牛を）持ってくんだけど、行って帰ってくると、必ず牛肉を持ってきて。私は牛肉好きなの。豚は嫌だけど。

《男女間の分業と谷ヶ城建設の業務》（11月3日）

原 田 谷ヶ城さんのとこに勤めたらあんまり（農作業や山仕事は）できない

という感じになりますよね。

栗城 できねえ、できねえ。もう、勤めていると駄目だ。

原田 ダメですよ。やっぱり畑とかそういう山仕事は、そうすると、谷ヶ城さんに勤めるようになって、奥さんなんかやっていたのですか。

コマノ だな。

与四郎 旦那さんたちは会社でべろべろ酔ってくんだ。奥さんたちは本気でうちで稼いでよ。

原田 奥さんのほうが偉いじゃないですか。

栗城 そうだ、頭上がんねえわなあ。

ノブ子 あの頃は毎日飲みだったもん。

角田 飲んで悪いなんてなかったからな。仕事が終わればちょっとやっつけてく。

#### 《村の経済と水害》(12月7日)

角田 (昭和)20年代、30年代は大変だった。

雄司 大変だったと思うよ。おれはもちろん分かんないけども、話を聞くと。(昭和)45,6年からだよな、こっち(の生活が楽になったの)なんか。あの頃は何をやっても、仕事もけっこういっぱいあったしな。この辺なんか土建業が一番だから、あの頃からだもん。あの44年の災害から復旧工事が始まったべ。谷ヶ城はその時点から拡大したんだもん、ばんと一気に。

角田 44年の災害があってからよくなった。

原田 大洪水になって、それでやっぱりだいぶ直すというので。

雄司 そうそう。(それまでは)厳しかったよ。農家だったって食べるものを作るぐらいだべ、ほら。販売するものはできないし。

榎本 谷ヶ城建設もそれまではわりと。

雄司 そうそう。ちっちゃかったのよ。小規模だった。

角田 公共工事ってなかったからな。(谷ヶ城建設は)製材業で最初始めてあったのだが、製材業もやっぱり買う人がいないと。

雄司 角田さんが撮った写真があるんだけど、玉梨温泉なんか今あったらす

ごい観光地になったべ(写真10)。吊り橋があって、大きな岩があって、あの下から(温泉が)自噴してたから、ポコポコと(玉梨温泉は44年の災害で自噴泉が埋まり、ポンプで地下から汲み上げねばならなくなった)。道路は道路で別にあって



写真10 (TK-P-003-009-22)

や、昔ながらの吊り橋があったり、岩があったりすると最高の観光地だったんだけど、結局あれ、川幅がものすごい狭かったの、昔は。今は広いから災害は起きねえけど。あの頃はしょっちゅうだもんな。33年にも起きたらしいから。

角 田 大きな岩がやっぱり流れをじゃまして駄目だということで、災害になってからは、全部壊しちゃった。

雄 司 川の幅だって倍ぐらいになっているよ。倍じゃきかないかしんねえな。かなり狭かったよ。

北 村 すると、ちょっと大雨が降るとぶわっと。

雄 司 そうそう。33年の災害の時も、うちを流されたりなんかしたみたいだから。しょちゅう温泉なんか(水を)被っていたらしい。堤防ちゅうだか何ちゅうだか、あれも低かったべ。今の橋なんかずいぶん高くなっていたけど、あそこから2メートルの先に下がっていたよ。向かいにある恵比寿屋さん(恵比寿屋旅館)ってあつて。あそこなんか、橋を渡って、こう上っていかなんなかったもん。俺たちは何とか分かるけども、今の人なんかそんなこと、話聞かせられたって分かんないわい。原型が浮かばねえべ。あの辺は変わっちゃったから。特に、この金山はひどかっただよな、44災は。今は談合なんて言うのかもしれないわい、昔はこの、今国道400号だけど、そこのぶんは谷ヶ城さんでやるとか、それから別の国道のほうは大和さんのほうでやるとかって。縄張りちゅうことはねえべだけでも……。なあなあでよ、



みんなが上手くいくようにやっていただよ。だから仕事が忙しかっただよな。残業なんて遅くまでやっていたらしいもんな。会社でパンとか牛乳を出して, 8時頃までやっていたんだよな, 間に合わねえから。

原 田 電源開発って, 川口(金山町中心部)のあっちのほうをね, だいたい(発電所関連の開発を)やられているわけだけど, あんまりそういうのってこっちは関係なかったんですか。

角 田 うん, 発電所関係はあんまりやらなかったわな。道路とか, 治山, 堰堤を作ったりする。道路改良だな, 主に。

雄 司 道路改良, 河川から, 砂防とか。

※ 写真に付した記号番号は地域映像アーカイブの資料番号である。